宮川健郎　私の出会った児童文学者たち　第９回
第３章　あまんきみこさん
その３　『ゆめでもいい』

あまんきみこさん（1931 年～）と母宮川ひろ（1923～2018 年）は、同人誌『どうわ教室』(1966 年 4 月創刊）でいっしょに勉強した仲間だ。あまんさんは、母より８歳年下だが、母が亡くなるまで、50 年あまりも、ずっと友だちでいてくださった。私も、小学生のころから現在まで、折々お目にかかることがある。

現代児童文学と国語教科書

前回も引いた、古田足日の「あまんきみこメモ」(『国語の授業』1986 年 2 月）は、国語教科書の話からはじまる。

> あまんきみこの作品が、八六年度から小国五社（小学校の国語教科書を発行していた学校図書、教育出版、東京書籍、日本書籍、光村図書―宮川注）の教科書にのっている、ときいた時、ふっと今昔の感とでもいうものが、胸をよぎった。
> ぼくは一九六一年度から小国教科書の編集に加わった。参加の理由の一つに、当時（六一年以前）使用の教科書に現在活動中の児童文学者の作品の少なさ、ということがあった。以来一五年（二五年の誤記か―宮川注)、今やそうではなくなった、ということが、今昔の感の一つである。
> （中略）“ファンタジー”は扱いにくいという、現場の声がある、ときいた。この「現場の声」というものを、ぼくは編集会議でもきく。あまんさんの作品をこんど五社使用ということは、もうその声が出なくなった、ということなのだろうか。この方が、今昔の感の、より大きい原因である。
> ただし、出なくなったとすれば、その理由はなぜなのか。もしかしたら、こういう作品になれた、ということかもしれない。そうだとすれば、手放しには喜べない。(引用は『現代児童文学を問い続けて』くろしお出版 2011 年による。以下も同じ。カッコ内原文）

古田のいう 1986(昭和 61)年度版の学校図書にはあまんきみこの「白いぼうし」（４年上)、教育出版には「おにたのぼうし」（３年下)、東京書籍には「名前を見てちょうだい」(２年上)「すずかけ写真館」(４年上)、日本書籍には「白いぼうし」（４年上)、光村図書には「ちいちゃんのかげおくり」(３年下)「白いぼうし」(４年上）がそれぞれ教材化されている。５社のべ７教材ということになる。(注１）

古田は、つづけて「あまんさんの作品の五社使用の背後には、現代日本の児童文学がその出発(一九五九年と、ぼくは考えている)以来、長編を中心として発展し、短編は実に少ないという事情がある、と思う。(中略）教科書には早い話が短編しかのらない。」(カッコ内原文)とも述べる。あまんきみこは、すぐれた短編の書き

手である。

私自身も、あるときから、長編化する現代児童文学と、短編しかのせられない国語教科書のちがいを身にしみて意識するようになった。1989(平成元)年度版から、小学校国語教科書の編集に参加したからだ。くわわったのは、古田足日が代表著者のひとりだった日本書籍の編集委員会である。古田先生にさそっていただいたのだ。仙台にある国立の教員養成大学、宮城教育大学の専任教員になって数年のちのことである。

あまんきみこ教材による授業

古田足日は、「“ファンタジー”は扱いにくいという、現場の声」はもう出なくなったのか、「もしかしたら、こういう作品になれた、ということかもしれない。」という。

前回のおしまいに、あまんきみこの「白いぼうし」が 1971（昭和 46）年にもう学校図書の小学４年、光村図書の小学５年の教科書に掲載されたことを書いた。「白いぼうし」のことだけを書いたけれど、同じ 71 年度版の教育出版３年には、「小さなお客さん」ものっていたのだ。

古田のとりあげた 1986（昭和 61）年度版の前の 83（昭和 58）年度版までに、このほかに「名前を見てちょうだい」「くもんこの話」「きつねの写真」といった、あまんの作品が各社の教科書で教材化されている。教科書にのれば、いろいろな教室でたくさんの授業が行われる。教材化された、あまんきみこ作品による授業のありかたを方向づけたのが、文芸学者の西郷竹彦（1920～2017 年）であり、西郷の主宰した民間教育研究団体「文芸教育研究協議会」（文芸研）だと考えられる。

西郷竹彦監修・文芸研編『文芸研教材研究ハンドブック』の第７巻『あまんきみこ＝白いぼうし』（明治図書 1985 年）は、全国にある文芸研のうち、福岡県の田川文芸教育研究会の著書である。「白いぼうし」の「主題・思想」については、「四つの場面でくり返したたみかけるように語られてきたものは、松井さんのやさしさです。」とする。

> （一）の場面では、いかに松井さんがお客を大事にし、おふくろの気持ちを大事にしているか、そして、その真心をそのまま受けとめるだけのやさしさを持った人物であるかが描かれています。

以下、(二)の場面の松井さんの「幼い者の心を思ってあげられるやさしさ」、(三)の「小さな女の子であってもお客として扱い、女の子の言動に疑いを持たない程男の子に心をうばわれている松井さん」、(四)の「遠くから男の子のことを思いやり、男の子の気持ちになって考えてやれる松井さん」、「小さなチョウの声を「よかった」と聞けるほどチョウのことを考えてやれるだけのやさしさを持った松井さん」が語られる。

この『ハンドブック』の巻末には、インタビュー「西郷先生に聞く　いかにして教材の本質へ迫らせるか」が掲載されている。「白いぼうし」の主題とされた「松井さんのやさしさ」にかかわる「やさしさというのは想像力といってもよいでしょう。想像力というのは、自分以外のものにの身になれる、立場に立てるということです。」ということばも記されている。

こうした文芸研の考えかたについて、批判的な意見を述べたのが 2010(平成 22)年の住田勝だ。

> 「白いぼうし」の実践報告を概観していくと、それらの実践のほとんどすべてが、「やさしい松井さんの人柄、人物像を読み取る」ことを主要な学習目標に設定している。この事態を、あえて〈呪縛〉と呼びたい。「やさしい松井さん」を読み取ることを、学習課題に掲げ続ける限り、「白いぼうし」の学習指導の改善は期待できないと思われるからである。「松井さんはどんなふうにやさしいか」を、テクストの言葉によって根拠立てることで、子どもも教師も“やさしく”思考停止し、その他の幾多の読みの可能性が、識閾下に葬り去られるのではないか。（住田「あまんきみこ「白いぼうし」の授業実践史」、浜本純逸監修・松崎正治編『文学の授業づくりハンドブック　授業実践史をふまえて』２、渓水社 2010 年所収）

住田は、「やさしい松井さん」という「呪縛」をのがれる手立てをテクストと授業実践史にさがしていく。

戦争のなかでの幼い女の子の死を描いた、あまんきみこの絵本『ちいちゃんのかげおくり』（上野紀子絵、あかね書房 1982 年）が教材化されたのは、古田足日が着目した 1986（昭和 61）年度版の教科書の一つ、光村図書の３年下だった。現在まで、ずっと掲載されている。

第一の場面、お父さんが出征する前日の家族みんなの「かげおくり」と、第四の場面、家族にはぐれてしまった、ちいちゃんひとりの「かげおくり」を「「対比・類比」の観点から授業で取り上げる実践例は多」いとするのは、中村哲也だ。中村は、「とくに「文芸教育研究協議会」（文芸研）の取り組みはその典型例をつくってきた。」と付けくわえる。（中村哲也「物語られた「戦争」を読むこと―教材『ちいちゃんのかげおくり』―」、田中実他編『文学の力×教材の力』小学校編３年、教育出版 2001 年所収、カッコ内原文）（注２）

西郷竹彦先生

私が文芸研の依頼ではじめて機関誌『文芸教育』（復刊）に寄稿したのは、1991（平成 3）年４月発行の 55 号、特集「ファンタジーの授業」だった。文芸研のファンタジーの理論と実践を検討する特集で、私は、「ファンタジー教材の授業・これでよいか」の見出しの三つの論考の一つを書いた。タイトルは「「白いぼうし」

を検討する」で、先にあげたインタビュー「西郷先生に聞く　いかにして教材の本質に迫らせるか」で展開されているファンタジー論についての疑問を述べた。（注３）西郷は、こういう。

　ファンタジーの世界とはどういう世界なのかというと、非現実の世界というのではなくて、現実と非現実の中間、つまり間（あわい）の世界です。「白いぼうし」でいえば、どこからどこまでが現実でどこからどこまでが非現実かは定かではありません。（カッコ内原文）

ファンタジーとは、現実と非現実の「間（あわい）の世界」なのだろうか。昔話（伝承メルヘン）などとちがって、ファンタジーは、「ふつう」と「ふしぎ」が区別され、両者を移り渡るには、何らかの手続きが必要だと考える世界である。Ｃ・Ｓ・ルイス『ナルニア国ものがたり』の最初の話『ライオンと魔女』（1950 年）なら、子どもたちが、衣裳だんすという通路をとおって（手続き）、ふしぎなナルニア国に行き、また、その通路をとおって現実に帰ってくるのだ。

あまんきみこの作品では、「ふつう」と「ふしぎ」を切りかえる手続きが明確には示されない。西郷竹彦が「「白いぼうし」でいえば、どこからどこまでが現実でどこからどこまでが非現実かは定かではありません。」と述べたとおりで、それが、あまんの文学のすぐれた独自性だといえる。

「ふつう」と「ふしぎ」を切りかえるスイッチの見えないファンタジーである『車のいろは空のいろ』の連作などは、むしろ、創作されたメルヘンに近い。そして、西郷竹彦の現実と非現実の「間（あわい）」にあるのがファンタジーということばは、ファンタジー一般についてではなく、あまんきみこの文学の特色の説明として聞けば、見事にあてはまるのだが。

私は、西郷竹彦のファンタジーについての考えかたに大きな違和感をいだきながらも、「西郷文芸学」に関心をもちはじめた。「西郷文芸学」の視点論などには、文学テクストについて具体的に考えるヒントがあると考えた。

私が寄稿した『文芸教育』55 号には、間もなく開催される「第４回青森文芸研 200 人集会」の案内が出ていたから、申し込んで参加することにした。「200 人集会」は、1991 年６月 22 日、23 日の土曜日曜に青森県十和田市の中央公民館で行われた。私は、当時暮らしていた仙台から、下りの新幹線にのった。このときの基調講演は西郷先生、記念講演は詩人の工藤直子さんだった。

「200 人集会」につづいて、同じ十和田市で、年度末までに、もっと少人数の３回の連続講座が開かれ、私は、それにも参加した。はじめてお目にかかり、身近に話すことになった西郷先生は、実におおらかなお人柄で、お酒を呑んだときには、肩を組んで、うたったりもしたのだ。

1996（平成 8）年から 99（平成 11）年にかけて、恒文社から刊行された『西郷竹彦文芸・教育全集』全 34 巻・別巻２のうちの第 32 巻『対談Ⅱ　児童文学者』に

は、西郷とあまんきみこの対談「〈松井さん〉とともに」も、古田足日との対談「「さよなら未明」以後」も収録されている。

巻末の解説は、「文学と教育のあいだで」と題して、私が執筆した。全 10 ページの解説は、四つの節にわかれているが、「３　西郷対談の特色と「ファンタジー」ということ」では、西郷のファンタジー論への疑問を繰り返して述べた。「教科書掲載作品に即して話をすすめるのが西郷氏の対談の特色だが、その結果、話の展開の範囲がせまくなってしまうこともないではないのではないか。」と書いている。西郷のファンタジー論にも、あまんきみこの「教科書掲載作品を中心に考えていることがよくあらわれているといえるだろう。」とした。

50 年後に届いた写真

古田足日が「あまんきみこメモ」（前掲）でふれた 1986（昭和 61）年度版以降も、あまんきみこの作品の教材化は進み、2020（令和 2）年度版までには、20 近い作品が各社の教科書で教材化された。2020 年度版では、のべ９教材が掲載されている。

ふたりの国語科教育の研究者に声をかけられて、３人で「あまんきみこ研究会」の設立を考えはじめたのは、2015（平成 27）年の夏だった。あまんきみこについて何らか論じたことのある 70 人ほどに手紙を出して、研究会への参加を呼びかけた。

「あまんきみこ研究会」の設立準備総会と第 1 回研究会を開催したのは、2016（平成 28）年２月 28 日、武蔵野大学武蔵野キャンパスにおいてだった。第 1 回研究会の研究発表は二題、宮川健郎「あまんきみことは誰か」と成田信子「「おにたのぼうし」教材化試論」である。

年に２回の研究会は、その後、東京圏だけでなく、大阪や太宰府でも開催された。「あまんきみこ研究会」は、あまんの作品の読まれ方にふさわしく、コロナ禍をはさみながらも、文学・児童文学の研究者と国語科教育の研究者／実践者がいっしょに議論をする稀有な場として成長しつつある。現在の会員は 50 名あまりで、私が初代の代表をつとめている。

『あまんきみこハンドブック』は、「あまんきみこ研究会」の最初の出版物として企画され、2019（令和元）年に刊行された。編集と刊行を引き受けてくださったのは、2009（平成 21）年に『あまんきみこセレクション』全５巻を刊行した三省堂だ。『ハンドブック』は、「あまんきみこの人と作品」「あまんきみこの作品を読む」「キーワードからみるあまんきみこの作品」「あまんきみこの周辺から」「あまんきみこをもっと知る」の五つの章で構成した。

最初に呼びかけたとき、現役で仕事をつづけている作家を対象とする研究会への参加をためらう声も聞こえた。あくまで研究会で、ファンクラブではないのだから、私の判断で、あまんさんご本人には、あえて何もおことわりしないことにした。作品を読み、研究するのは、私たちにあたえられた自由だと考えた。しかし、設立準備総会から２年たって、活動が軌道にのったころ、研究会のメンバーから、それ

でも、一度、あまんさんにお話ししたらどうかとうながされた。私は、あまんさんに電話をして、「あまんきみこ研究会」が発足して、もう２年になることをお話しした。電話のあとには、そのとき１号だけ出ていた研究会の会報もお送りしたのだ。

やがて、あまんさんからも、私あての手紙が届いた。Ｂ５判くらいの封筒を開けると、中に、もう一回り小さい封筒が入っている。小さい封筒にも封がしてあって、表側に大きめの付箋が貼ってあった。――「宮川健郎様　こんどは、私がびっくりさせてくださいね　あまんきみこ」付箋には、それだけ書いてあった。ああ、ご自分のお名前の研究会の会報をお送りしたから、おどろかれたんだなと思いながら、封を開けた。

小さなクリアファイルに３枚の写真がはさんである。モノクロが２枚、カラーが１枚、撮影者はふたりだろうか。いずれも、1968（昭和 43）年３月、『車のいろは空のいろ』の出版記念会の写真だ。モノクロのうちの１枚は、運転手の松井さんの扮装の私が、着物すがたのあまんさんに花束を差しあげる瞬間のショットである。花束をもつ手は、白手袋だ。立ちあがった、あまんさんのかげになって、お顔が見えないが、左どなりの席で大きく拍手をしている、その手は、坪田譲治先生（1890～1982 年）だろう。そのまたとなりの与田準一先生（1905～1997 年）のお顔が見える。与田先生は、あまんさんが作品を書くきっかけをつくった童謡詩人・童話作家だ。

モノクロのもう１枚とカラーは、今西祐行先生が差し出すマイクの前で、私と母宮川ひろが歌をうたっている場面である。出版記念会から 50 年後に、はじめて見た写真だった。

前々回に書いたとおり、この日の私は、花束贈呈という母の言いつけに憂鬱になり、１年後には病気で仕事をやめることになる父の健康を気にする屈託をかかえていたはずだ。ところが、写真のなかの 12 歳の私は、ずいぶんと、にこにこしていて、茫然とするほど「よい子」なのだった。

タクシーは走りつづけていた

あまんきみこは、現役で仕事をつづけている作家である。

2020（令和 2）年には、旧満洲で生まれた、あまんさんが敗戦後に引き揚げてくるまでの体験をもとにつくられた絵本『あるひ　あるとき』（ささめやゆき絵、のら書店）が刊行された。

そして、『新装版　車のいろは空のいろ　ゆめでもいい』の刊行は、2022（令和 4）年もおしまいに近いころのビッグニュースだった。1968（昭和 43）年に出版された連作短編集『車のいろは空のいろ』にはじまるシリーズの４冊めにあたる。『続車のいろは空のいろ』は 1982（昭和 57）年。2000（平成 12）年には、最初の本を『車のいろは空のいろ　白いぼうし』とし、続編を『同　春のお客さん』として、『同　星のタクシー』をくわえた３冊が出ている。３冊本は、「白いぼうし」などの収録作品が各社の国語教科書にのることによって、本文にさまざまな異同が生

じたのを統一する「定本」だった。この「定本」の３冊によってシリーズは完結したと思っていたから、『ゆめでもいい』には、ほんとうにびっくりした。３冊本から 22 年たっていたし、最初の出版からは 54 年ののちである。松井さんの運転する空いろのタクシーは、ずっと走りつづけていたのだ。

『新装版　車のいろは空のいろ　ゆめでもいい』には、７編が収められている。雑誌などに発表されたままになっていたのが３編、あとの４編は書き下ろしである。

巻頭は「きょうの空より青いシャツ」、書き出しはこうだ。

うすみどりの林のなかのほそい道を、空いろのタクシーがぐんぐん走っています。

うんてんしゅは、松井五郎さん。

（春は、やっぱり、いいなあ。きょうは、いっぺんにあたたかくなった。）

となり町までお客を送って、もどる途中、大きな木の下で、青いぼうしをかぶった子だぬきが短い前足の片方を高くあげている。松井さんは、その前でぴたりと車を止めて、「どうぞ」と笑いかける。「えっ、のっていいの？」「うわあ、ぼく、のっていいんだあ。」といって、子だぬきがのり込んでくる。行き先は、「この林のおわるとこ」、なの花橋の手前だ。

走り出した車のうしろの座席から、「くくくくく。うれしいなあ。くくくくく。」という笑い声が聞こえる。――「ぼく、はじめてだよ。はじめてのったよ。はやいなあ。すごいなあ。くくくくく。」やがて、歌いはじめる。――「きょうの空より青いシャツ／きょうの空より　青ズボン／ね、ね／にあうでしょ」子だぬきは、青いシャツとズボンの人間の男の子に化けているつもりだけれど、松井さんからは、やっぱり、たぬきに見える。子だぬきは、化けていなかったのだ。

松井さんのタクシーがはじめて走ったのは、作者が雑誌『びわの実学校』に投稿して掲載された作品「くましんし」（1965 年 10 月）である。松井さんをわが家に招き入れた乗客の紳士は、「じつは、わたしは、北海道の釧路のさきの“こたたん山”で生まれたくまでしてね。」と打ち明けて、そのすがたを現す。紳士は、「なんだか気もちがいい。ほんとうのすがたのままでいられるということは、それだけで、とてもうれしいことなのですよ。」といい、松井さんは、「顔はくまになっても、かわらないものが、一つだけあります。それは――、目です。」という。

最新刊の『ゆめでもいい』では、「くましんし」にある「ほんとうのすがたのまま」の肯定がより強くなったと思う。巻頭の子だぬきだけではなくて、ねこたちも（「子ぎつねじゃないよ」）、たぬきの家族も（「きこえるよ、〇（マル）」）、物語のなかで、すがたをあらわにする。

何度も述べてきたように、「ふしぎ」の世界の入口と出口がはっきりしているファンタジーではなくて、現実と「ふしぎ」の境界があいまいで、にじみあっている

のが、あまんきみこの世界だ。その特質もよりはっきりして、作者らしい物語になった。松井さんが車ごと乗客の夢のなかに入っていく作品も二つある（「ゆめでもいい　ゆめでなくてもいい」「ジロウをおいかけて……」）。

『車のいろは空のいろ』のもともとの挿絵は北田卓史さんだったけれど、1992年に亡くなった。今回の第４作は、黒井健さんが絵を描き、前の３冊も新しく描いた。北田さんの空いろのタクシーはセダン、黒井さんは、最近よく見かけるミニバンタイプになっている。

（第３章「あまんきみこさん」おわり）

（注）

１、「あまんきみこの教科書掲載詳細一覧」（木下ひさし作成、あまんきみこ研究会編著『あまんきみこハンドブック』三省堂 2019年所収）参照。あまんの作品の教科書掲載については、以下も同じ。

２、中村哲也のいう文芸研がつくってきた「ちいちゃんのかげおくり」の授業の「典型例」については、荒木英治「【小学三年】「ちいちゃんのかげおくり」（あまんきみこ）」（『文芸教育』52号、1990年９月）などを参照。

３、この論考は、「あまんきみこ「白いぼうし」、その見えないスイッチ―『文芸研教材研究ハンドブック』を読む―」と改題して、宮川健郎『国語教育と現代児童文学のあいだ』（日本書籍 1993年）に収録した。なお、文芸研の『文芸教育』には、もう一度、79号（2000年８月）の特集「あまんきみこを授業する」に「あまんきみこの「原型」」と題して寄稿している。

（付記） 宮川健郎「ファンタジー」（あまんきみこ研究会編著『あまんきみこハンドブック』前掲所収）、宮川健郎「親と子の本棚　ゆめでもいい」（『Z-SQUARE』2023年４月）と重複する部分があることをおことわりします。

第３章「あまんきみこさん」関連年表

1931（昭和 6）年　8 月 13 日、あまんきみこ、旧満州（現中国東北部）撫順に生まれる。本名阿萬紀美子。

1945（昭和 20）年　8 月 15 日、敗戦。

1947（昭和 22）年　3 月、あまんきみこ、引揚船で帰国。

1959（昭和 34）年　あまんきみこ、結婚して長女長男を得たのち、4 月、日本女子大学家政学部児童学科（通信）入学。紹介された与田準一のもとをたびたび訪ねる。

1963（昭和 38）年　10 月、坪田譲治主宰の童話雑誌『びわの実学校』創刊。あまんきみこは、創刊号を与田準一から手渡される。

1965（昭和 40）年　1 月、あまんきみこ、日本児童文学者協会主催「新日本童話教室」第 1 期が開講され（於・びわのみ文庫）、受講する。宮川ひろは 5 月からの第２期を受講。10 月、あまんきみこ「くましんし」（『びわの実学校』第 13 号）。

1966（昭和 41）年　4 月、あまんきみこ、宮川ひろら『どうわ教室』（土曜会）創刊。

1968（昭和 43）年　3 月、あまんきみこ『車のいろは空のいろ』（ポプラ社）。出版記念会が行われる。日本児童文学者協会新人賞など受賞。

1969（昭和 44）年　7 月、あまんきみこ『おにたのぼうし』（いわさきちひろ絵、ポプラ社）。10 月、宮川ひろ『るすばん先生』（ポプラ社）。

1974（昭和 49）年　あまんきみこ、『びわの実学校』同人にくわわる。

1982（昭和 57）年　3 月、『続　車のいろは空のいろ』（ポプラ社）。7 月 7 日、坪田譲治没。92 歳。8 月、あまんきみこ『ちいちゃんのかげおくり』（上野紀子絵、あかね書房）。

1997（平成 9）年　2 月 3 日、与田準一没。91 歳。

2000（平成 12）年　4 月、『車のいろは空のいろ』シリーズ全３冊（ポプラ社）。

2008（平成 20）年　3 月、『あまんきみこ童話集』全５冊（ポプラ社）。

2009（平成 21）年　12 月、『あまんきみこセレクション』全５冊（三省堂）。

2018（平成 30）年　12 月 29 日、宮川ひろ没。95 歳。

2019（令和元）年　9 月、あまんきみこ研究会編著『あまんきみこハンドブック』（三省堂）。

2020（令和 2）年　7 月、あまんきみこ『あるひ　あるとき』（ささめやゆき絵、のら書店）。

2022（令和 4）年　11 月、『新装版　車のいろは空のいろ　ゆめでもいい』（ポプラ社）。